

はっとも審査委員

練りもの粉もの文化発信

第1回ははっとなしごめコンテスト(マルニ食品主催、二階堂玲子代表)が10月20日、麺や文左登米本店で開かれました。

二階堂会長は「おかえりモノの効果をビックチャンスと捉え、練りもの粉もの文化発信に努めていきたいと企画しました」と挨拶。応募があった約530点のレシピから、書類選考で6点のレシピを厳選。熊谷市長や登米市観光物産キャラクターのはっとなしごめ、食に精通する8人の審査員が、未来に広がるはっとなしごめの食文化発展を感じながら厳正に審査し、「はっとなしごめサクサクアップルパイ」が初代グランプリに決まりました。



考案者の思いと共にレシピが紹介され、個性的なアイデア料理に審査員は驚嘆していました。

被災から防災を学ぶ

津山中で防災学習発表会

「防災学習発表会」は10月13日、津山中学校(千坂佳織校長、生徒84人)で開かれ、同校生徒が地域住民と関係者約30人の前で、学習の成果を披露しました。

同授業は、津山町域で発生した洪水被害に対する防災授業として地域住民と生徒が連携して取り組んだもの。生徒たちは5月から学習を進め、地域住民へのフィールドワークなどを通して調べた浸水被害状況や被災時の住民たちの行動などを発表しました。発表を終えた阿部泰知さんは「想像以上に浸水被害が多くて驚きました。この経験を風化させず、みんなで共有していくことが大事だと感じました」と、話しました。



生徒たちは「災害前に高い場所へ車を移動する」「ハザードマップを確認しておく」など、防災への提案も発表しました。

育んできた文化の灯 劇団結成20周年記念公演



左中:学校生活に悩みを抱える3人が「今夜、青い鳥音楽団の演奏会が開かれる」と書かれた招待状に導かれ、旧校舎で鉢合わせた。誰かのいたずらだろうかと危ぶんだ時、美しいメロディーが聞こえてきた。楽器たちと3人の時間を越えた青い鳥を探す旅が幕を開ける。右:主役を演じた3人。左から高橋佑奈さん=佐沼高1年=、長谷川ゆあさん=南方中3年=、成田小梅さん=佐沼高1年=

劇団ドリーム☆キッズ第19回ミュージカル公演「myMelody ～大空高く飛んでいけ!～」は10月17日、登米祝祭劇場で開かれ、午前、午後の部を合わせて421人が来場しました。

公演は、新型コロナウイルス感染症対策に係る「緊急事態宣言」に伴う会場の休館や感染拡大防止の観点から中止もやむを得ない状況でした。ですが、今年は劇団結成20周年の節目の年。団員は自分たちの公演を通して地域に明るさを取り戻してほしいと、コロナ禍という厳しい環境の中懸命に練習を続けました。劇団関係者も公演を実現させ、今まで支えてくれた地域に団員たちの元気を伝えたいという強い思い

から開催に向けて話し合いを重ね、延期されていた公演の幕開けにこぎ着けました。

公演を鑑賞した須藤僚大君(11)、早彩さん(10)＝東和町米川8区＝は「驚いた時や怒っている時など感情が変化する場面の表現力がすごいと思いました。心のこもった迫真の演技が伝わってきました」と話しました。

主役を演じた3人は「主人公は感情の表現や物事の考え方、抱える悩みもそれぞれ違いますが、私たち自身と重なる部分を感じながら演じました。公演を見た人へ何か新しいことにチャレンジする力を届けられていたらうれしい」と口をそろえました。

美しい自然に囲まれ

ホールストロークプレー

「第1回登米市長杯あじさいカップパークゴルフ大会個人戦」(登米市パークゴルフ協会主催、西丸重雄会長)は10月19日、高森パークゴルフ場で開かれ、約190人のプレーヤーが参加しました。

大会は、パークゴルフを通じて交流を深め、健康増進につなげることを目的に実施。コースを回るメンバーは、住んでいる地域が異なる3、4人でパーティを編成。4班46パーティに分かれ、36ホールストロークプレーで個人成績を競いました。参加者は記念すべき第1回の優勝を目指して元気にプレーし、親睦を深めながらコースを回りました。



参加者は、チーム内で励ましたり褒め合ったりしながら、和やかにコースを回り、プレーを競いました。

地域課題解決へ提案

宮学大生との意見交換会

「登米市と宮城学院女子大学の意見交換会」は10月18日、長沼ボート場クラブハウスと森舞台で開かれ、同大学生19人と市職員が参加しました。

意見交換会は「登米市のまちづくり・SDGs」「女性が働きやすい市役所」をテーマに開催。学生たちは、他自治体の取り組みを例に、地域課題への解決策やSDGsを生かしたまちづくりを提案しました。3年の夏井美輝さんは「登米市についていろいろ調べ、住みやすく可能性のあるまちだと感じました。実際に来てみないと分からないことが多くあったので、今後も現場に訪れることを大切にしていきます」と、話しました。



宮城学院女子大学との意見交換会は今回が初めての取り組み。実際に市職員として働く女性の声も紹介されました。